

『戦争体験講演会』

日 時 平成 21 年 8 月 1 日

会 場 湖南省共同福祉施設（サンライフ甲西）

主 催 湖南省平和祈念のつどい実行委員会

演題

「私の戦争体験」=南洋諸島沖合いの海上戦と沖縄地上戦を生きのびて=

<5歳の時に味わった戦争のこわさを語る>

うえす きよし
講師：上江洲清

◎ 講演を行なうにあたって

私は今から51年前の1958年5月に沖縄からブラジルへ家族とともに移住しました。当時は国策で海外へ移住が奨励され、特に沖縄から南米への移住がさかんでした。それというのも戦争が済んで1,2,3年がたっても、沖縄は米軍の占領下にあり、基地もどんどん増え、町の中を軍用車がはしり回り、週末には軍服姿の米兵が町に溢っていました。そのため、米兵が引き起こす事件、事故は日常茶飯事で住民は平和とはほど遠い生活を余儀なくされていました。

そんな沖縄においてはいつまた戦争に巻き込まれるかもしれないという不安から、多くの人が夢と希望を求めて南米—ブラジルへと移住したものでした。

ブラジルは大変遠い国で、船で太平洋を渡りパナマ運河を通過してから大西洋に出て、ブラジルのサントスという港に着くまでになんと50日もかかりました。ブラジルでは山を切り拓いてコーヒーの木を植えたり、陸稻を作ったりしましたが、日本とは言葉や習慣や気候風土、食べ物などすべてが違うので生活に慣れるまでは大変苦労しました。

あれから、半世紀もの月日がたち、世の中はすっかり変わってしまいました。特に、日本は戦争に負けた国とは思えないほど驚異的な発展を遂げ、平和で豊かな国となり昔は日本から外国に移住しましたが、今では外国人が日本に働きに来るという時代になったのです。

私も時代の流れに乗って日本に働きにきて、2004年から湖南省にある日系ブラジル人が居住するビルの管理者として働くようになりました。

湖南省に住むようになって、しばらくすると、私が沖縄出身で戦争体験者ということで、いつのまにか「戦争体験」の講演を行なうようになったのですが、当初は平和なはずの日本にあって<なぜ、いま、戦争の話なのか>そんな疑問を抱いていました。しかし、平和ないまだからこそ、戦争のおそろしさやこわさを伝えることで、真の平和のありがたさ、そして、命の大切さを知つてもらえるのでは、という思いから今日まで、4年間、「戦争の語り部」を続けてきました。

思えば、あの忌まわしい戦争がすんでから、ことは64年目を迎えています。その戦争のことは、すでに遠い昔の出来事のように思え、記憶も薄れるものですが、戦争で傷ついたものにとっては、いつになんでも、脳裏や体から消えるものではありません。

私が戦争を体験したのは、5歳の時でした。5歳という幼少の時とはいえ、残酷で悲惨な体験をしたものとして、戦争を知らない多くの方々に伝え次いで行く責任のようなものを感じます。

この人間の愚かな行為は、二度とあってはならないし、いまある平和のありがたさをしみじみとかみ締めて欲しいと思います。その願いをこめて、これから『私の戦争体験』—5歳の時に味わった、海上と地上戦のこわさ—を語ることとします。

◎ 講演のあらすじ

★太平洋上で戦禍に遭う

さて、みなさん、私は昭和14年に南洋諸島の一つテニアンで沖縄出身の両親の長男として生

まれましたが、3歳の時、ポナッペという島に移り、5歳の時まで両親と3歳の弟の4人でこの島で平和に暮らしていました。

ところが、1941年に勃発した日米戦争がだんだんと悪化し、南洋諸島にも戦雲が押し寄せ、1944年の2月に父が日本軍に召集されました。残された私たち母子3人はほかの多くの人々とともに急速、父母のふるさと沖縄へ送還されることになったのです。私たち引揚者を乗せた何隻もの輸送船団は日本を目指してトラック諸島方面へと航行し始めたのですが出航後、わずか三日目に「緊急発令！本船前方に敵機出現せり！！全員に非常時態勢を命ずる。」というアナウンスが船内に流れ、緊急ブザーが鳴りひびいたのです。さあ大変！本船危しです。間もなく、グーンという米軍機の爆音が船の上に聞こえたかと思うと、「ドーン」「ドカーン」と耳をつくざくような大轟音と激しい衝撃が船全体を襲い、その衝撃で私たちは床に叩きつけられ強いショックを受けました。本船は非情にも米軍機の爆撃にさらされたのです。

実は、南洋諸島海域の制海空権はすでに米軍に奪われており、この日、輸送船団は、不運にも米軍の一斉爆撃をうけたのでした。

突然の爆撃で、船内は子どもの泣き叫ぶ声や恐怖におののく人たちの叫び声で大混乱となり、逃げ場を求めて大勢の人が一斉に階段めがけて殺到しました。私たち親子もパニックにおちいりながら人ごみを掻き分けなんとか、階段にたどりつき、私が右足を階段にかけようとしたその時です。鈴なりになった目の前の階段がグラグラッと崩れ落ち、同時に床板が抜け「アッ」と言う間に船底ヘドドーンと落ち込んだのです。目の前にぽっかりと穴があき、私も危うくその穴にのみこまれるところでしたが、私の手をにぎっていた母が、おもいっきり私を後ろへ引きもどしたので船底へ落ちこまことに助かりました。

ほんとに「アッ」というまの出来ごとでした。真っ暗い船底に落ち込んだ人々の「助けてくれー」「助けてくれー」というあの大悲痛な叫び声がいまでも私の耳の中に残っているような気がします。

船内は硝煙がたちこめ、一刻も早くそこから抜け出さないと窒息しそうになってきました。右往左往しているうちに、船のかべに、つな梯子がたれさがっているのに気付き、私たち母子は、この梯子にしがみつき、やつとの思いで甲板にはいでたのです。すると、そこには爆破された煙突がくづれ落ちており、後部甲板からは火柱とともに黒煙がもうもうと立ち上り天空を覆っているのです。何人かの船員が躍起になって消火にあたっているのですが、火はなおも燃え広がり熱風にあおられて海に転落する者や衣服に火が着き、火だるまとなって床をころげ回る者、爆撃で手足が吹っ飛ばされ、血の海の中をのたうちまわる者など、そこはもう目もあてられない惨状を呈していました。

右へ左へと逃げまどう人の波にもまれながら、私たち母子は船首をめざして右舷側の通路に向かって走りだしていたのですが、ちょうどその時、上空を旋回していた米軍のグラマン機が急降下ってきて、「ダッダッパー ダッダー」と爆撃してきたのです。とたんに欄干が吹っ飛び下降中の救命ボートの滑車は断ち切られ、ボートは宙ぶらりんになってしまった。なおもグラマン機の爆撃が続く中、私は弟を負ぶっている母にしがみつき「こわいようー こわいようー」と声をふるわせ立ちすくんでしまいました。するとこんどは、目の前の通路の天井に架かっていた過熱蒸気パイプが炸裂したからたまりません。「シャッシャシャー」と過熱蒸気がジェット噴射し、私たちの目の前にいた人たちを直撃たちどころに茹でただれてしまい、噴射の勢いで吹き飛ばされた人々はアッという間に海へ転落してしまいました。

過熱蒸気の噴射で、通路はもうもうと蒸気が立ちこめ、生臭いにおいが漂っている中を私たち母子はなんとか前へ進もうとしたのですが、そこには茹でただれて死んだ人や、爆撃を受け、無惨な姿で死んでいる人が無数にころがっており、とてもまとまることはできません。まるで地獄の入り口に足を踏み入れたような怖さに襲われ、私は母の着物のすそに顔をかくしながら、幾人の死体をまたいで前へとすすんだのです。これまで何時間も恐怖に耐えてきた私はその緊張のあまり、すっかりのどが渴き『水がほしいよう！』と母に訴えたのです。すると、母はとっさに目の前の階段を指さし「そこをあがっていきなさい」と言うのでとんとんとその階段をかけあがると、そこは船長室でした。目の前にヤカンがあるのを見つけ、『船長さん！ そのお水ち

ようだい』』というと船長は振り向き、私を見ると無言のうちにヤカンを渡してくれたのです。私がヤカンの口からじかにゴクンゴクンと夢中に水をのみ終えると、『ぼうや、早くそこの階段から下へ飛び降りろ！！』と、きつい口調で私をせかすのです。下では一人の船員が私を見上げ、『ぼうや、早く飛び降りるんだ！』と両手を広げているのです。この時、爆破された後部甲板はすでに浸水して本船は右に傾き、もうすぐ沈没しそうになっていたのです。

ためらっているひまなどありません。私が目をつぶり「エイッ！」とばかり飛び降りると、下で私をうけとめた船員は、本船わきの海面でぐらぐら揺れている救命ボートに私を投げ込んだのです。船の上でそれを見ていた母も弟をおぶったまま、ボートに飛び込み、そこにうつぶせになっている私をだきおこしくだいじょうか》という表情で私の顔をのぞきこんだのですが、投げ込まれた恐怖で体があるえ口がきけないでいる私は母にしがみついていました。目の前の本船は傾きを増しもう沈没寸前です。甲板からは人たちが悲鳴をあげてすると海面へ滑り落ちていくのです。ボートは一刻も早く本船からはなれないと波のうずにまきこまれてしまうのです。私を助けた船員ともう一人の船員が必死にオールを漕ぎだしたかと思うと、本船はドドドーっと水柱を立てて見る見るうちに海底へ沈んでしまったのです。

★トラック島に漂着

私たち母子はこうして、ほかの15,6人の人達とともに、太平洋上の戦禍から辛うじて助かり、まさに九死に一生を得たのです。

そして、私たちを救ったボートは、それから2日後にトラック諸島の一つに漂着しました。ところが、この島にも日本軍が駐留していたため、すでに米軍の爆撃をうけ、島々の沖合いには撃沈された無数の日本軍の艦船や戦闘機の残骸が波間に浮き沈みしていました。島にあった日本軍の施設のほとんどが破壊され、軍隊は小隊ごとに台地のふちのがけ下や中腹のあちこちに避難壕をほってそこに退避して敵の空襲に備えていたのです。

命からがら漂着した私たちを収容したのは日本軍でしたが、私たちが撃沈されたはずの引き揚げ船からの難民と知って驚きはしたものの、『ここは戦場だ。軍隊がみなさんの面倒を見ることはできない。食料も乏しいのだ。』と私たちを受け入れることをこばみました。ところが、途方にくれた私たちを救ったのは、なんと、にわかにやって来たスコールでした。土砂ぶりの雨に追われて、私たちは「ワッ」とばかりに近くの壕にかけこんだのです。この壕の中はけがをした兵隊でいっぱいでした。行き場のない私たちは結局、ここに居させてもらうことになったのですが、それは日本軍と生死をともにすることを意味するものでした。その日は玄米のおにぎりがくばられやれやれと思って食べたのですが、それからといふものは米軍の空爆がはげしく、壕の中で空腹のまますごす日が何日も続きました。時には玄米のなま米が配られ、それを噛んで飢えをしのいでいましたが、兵隊の中には防空壕内のやし材に巣くアブラ虫をほじくり出しむしやむしやたべるのもいました。日本軍に対する一方的な米軍の空爆が続き、日本軍が一発撃つと100発が打ち込まれるありさまで日本兵がどんどん死んでいきました。

目の前で死んでいく沢山の兵隊さんを見て、私は（戦争とはなんてひどいものか）と思い、日本の兵隊さんと一緒にいると私たちも死ぬかも知れないという「死の恐怖」と、でも、どんなことがあっても死んではならない、生きていきたいという「生への執着」—この二つの思いが小さな私の胸に込み上げてきました。

そんな中で、死の戦場となったこの島から脱出できたのは、幸か不幸か、母と私が負傷したため、沢山の傷病兵とともに赤十字船に収容されたからでした。（この船は病院船とも呼ばれ、通常は戦場で負傷した兵士のみを収容し、治療にあたるのです）この船はパラオ島向け出港。同島に着くと、私たち母子は日本軍の野戦病院で治療受け、その後、軍用船に乗せられこんどは台湾へ向かったのです。台湾までの航海中も何度か米軍の爆撃をうけながら難を逃れ、最後は台湾から祖国日本への決死の航海となり洋上の戦火をくぐり抜け、神戸港へ無事到着、私たち母子は、移民収容所（現：海外移民記念センター）に海上難民として収容されたのです。

★沖縄の地上戦

その後、鹿児島から船を乗り継いで、父母のふるさと・沖縄にたどり着いたのは4月半ばのことでした。海上戦から生き延びて来て、ほつとしたのも束の間、10月10日を期して米軍の本

格的な沖縄空襲がはじまり、翌、45年3月には米軍が上陸を開始、日、米軍による日々激しい地上戦が繰り広げられ、沖縄は本土防衛のための決戦場となったのです。耳をつんざく砲弾の嵐の中をあの壕からこの壕へと逃げまどうちに弟が弾にあたって死んでしまったのです。血だらけになった弟はいくらやすっても、もう動きませんでした。弟が死んでしまったと知った私はとてもかなしくて母にすがりついてなき叫びました。弟をなくした上、逃げ場を失った私たち母子は、最後に親戚一同や他の家族とともに、先祖代々のお墓へ逃げ込み、身をひそめていました。するとある日、一人の軍人が飛び込んできて、そこにいた自分の家族に1個の手榴弾を手渡し『日本はもうだめだ。最後はこれで・・・オレは軍人だここで一緒に死ぬわけにいかない』と言い残し、出て行ったのですが、その直後に「ダッダ、ダッダー」という銃声が響き、その軍人は、無惨な最期をとげたのです。これを目のあたりにした家族は泣き叫び、手にした手榴弾の信管をぬこうとしたのです。と、その時、私の伯父が手榴弾を奪い取り外へ投げ捨てて『死じえならんどう！』(死んではいけない！)と叫んだのです。

墓のそとからは「ガタ ガタ」と戦車の通る音や米軍兵士の叫び声が聞こえてきて、いまにも銃弾が打ち込まれるのではないかと、みなふるえていました。空からは宣伝ビラがまかれ、『ミナサン、ゴウカラ デテキナサイ ハヤクデテキナサイ』という声まで聞こえてくるのです。

3月に上陸した米軍と日本軍との戦いは熾烈を極め、6月までの3ヶ月間に沖縄は一木一草に至るまで焼き尽くされ、日本軍は壊滅し、沖縄は完全に米軍に掌握されてしまったのです。空からまかれる宣伝ビラもその事を伝え『センソウハ、モウオワリマシタ。シンジテ、デテキナサイ！！タベモノ、ミズモタクサンアリマス ハヤクデテキナサヘイ』という呼びかけがひっきりなしに行われ、私たちを動搖させました。そのうち、『・・・ハヤクデテキナサイ。コレガ、サイゴノツウチデス』と、なおも空からのアナウンスはつづくのです。これを聞いて、思い余った伯父が『よし オレが確かめてくる』というなり、身に着けていた“ふんどし”を脱ぎはらい頭上に掲げて家族が止めるのも聞かず、墓を飛び出していったのです。

◎『さあ 皆さん、伯父はどうなったと思います?』

その2日後、『おーい みんなでてこーい。大丈夫だー でてこーい』と元気な伯父のさけぶ声がするではありませんか。おそるおそるみんなが墓から出てみると、なんと伯父が両手を高々にふってよろこび勇んだ表情で駆けてくるではありませんか。伯父は米軍の捕虜となって帰ってきたのです。家族と抱き合ってよろこびながら『もう戦争はすんだ。さあ みんなのいるところへ行こう』と伯父が先頭に立って歩きだす先に、米軍兵士5,6人が私たちを待ちうけていました。ついに私たちも生きて米軍の捕虜となったのです。私たちはトラックに乗せられ、赤道(あかみち)というところに急設された捕虜収容所に連れていかれました。そこにはすでに大勢の人が収容されていてみな生きている喜びで沸き溢っていました。庭には大きななべに山芋を炊き込んだ雑炊が用意されていて、さきに来た人たちが、みなに振舞っていました。私はこの温かい雑炊を腹いっぱいいたべながら、『戦争はほんとに終ったの』と母に聞きました。『うん・・終ったよ』と私の手を取って笑顔で話す母を見て、あの怖かった戦争はほんとに終ったんだなあと、うれしくなると同時に弟のことが思いだされ『でも、弟がいなくてさびしい。どうして死んだの 戦争がなかったらよかったのに！』と母の目をみつめていると、『うらむなら、世をうらみなさい。ほんとに戦争がなかったらよかったのにね～』と母は悲しげに私の手をにぎりしめました。

私たちが捕虜になったのは、沖縄の地上戦が終結した1945年6月23日の直後でした。
そして、それは昭和天皇が終戦宣言を下した8月15日のおよそ50日前のことでした。

時間となりましたので、これで『私の戦争体験』=5歳の時味わった戦争の怖さ=を終ります。
この続きはまたの機会にいたします。
ご清聴たいへんありがとうございました。